

豆守は云はれる儘に再び飲ます、又一杯と、都合三杯飲み盡し「忠」ア、之れ
で何うやら自分の身体のようになり申した、最早や今世に望みござらん、忠
澄は非常に喜悅んで居る、スルト伊豆守は「伊」コリヤ忠彌、汝も望みが足り
たぞ申すか「忠」如何にも、仰せの通りでござる「伊」然らば、一味徒黨の連名を
申し立てよ、白状いたせ「忠」アハ、……何を白状……「伊」黙れツ、同志の者を
白状いたせと申すのじやわい「忠」ハツハ……、丸橋忠彌は天下の豪傑であ
る、一旦誓つて云ふまじと決心した以上は、断じて口外いたさぬ、今更ら
白状いたすと思ふか、アイヤ松平伊豆守……、汝は智恵伊豆と呼ばれ、徳川
家を背負つて立つて居る器量人だが、余程呆痴た奴である、必竟ず此の度の
隠謀成就いたすに於ては、其の方如き役人は、又何かの役に立つ人物である
から、助け取らして我が家來となし、拙者が酒の酔醒の時は、コリヤ伊豆水を
持て、足を揉め、肩を叩けと、斯ふ云ふ驕梅に召使つてやる考へであつた、然

るに斯く事露現と相成り、我は召捕られた事であるが、最早萬事休す、仕方が
ないから一杯の水を飲みたい爲めに、偽つて白状すると欺き、汝に水の給仕を
命じたのである、無益の事を尋ねんより、早く此の忠彌を刑罰に處せよ、何を
呆痴者奴がツ」ハツタと睨んだ面魂、流石智恵と呼ばれた松平伊豆守も、
忠彌の爲めに一杯喰はされ、大いに赤面して奥へ這入る、居列ぶ諸役人の面々
何れも其の度胸に感じ入り、就中石谷左近將監は「佐」何うも、恐ろしい強
情な奴もあるものだ、老中松平伊豆守殿に水の給仕をさせ、其の上にて白
状もせず、罵詈雑言を吐くとは大膽な奴、此の様子では逆も白状しないであろ
う」と、奉行所へ連れ歸り、尙も手を代へ品を代へて責め立てたが、相變らず
白状しない、流石の諸役人も呆れ果て、其の後は拷問もせず、牢内へ投り込ん
で置く事に相成つた、夫れは借て置き、此方由井道場を逃げ出したる佐原重兵
衛は、其の身を非人の姿に扮し、密かに江戸表を落ち延びたは、駿府へ乗り込

み様子を見届げんの心底重「何うか、先生は御無事で居て下されば宜いが、乃公が行く迄は若しもの事があつては大變だ」と、心配しながら、ドシ／＼と夜を日につき、駿府を差して乗り込んで来る、此方駿河の府中に於ては、由井民部之介正雪、丁度七月二十一日の夜に當つて、江戸表の騒動は夢にも知らず、自分は府中へ着くと其の儘、病氣と披露して一室に閉ぢ籠り、豫て期したる七月二十六日に事を擧げんと、京都、大阪、江戸表へは夫々通知を發し、正雪が召し連れて來た五百名の人數は、成べく自立たないやうに、處々方々に、別れ／＼に宿を取り、互いに氣脈を通じ、重立つものが時々集會を催ふし、計畧を示し合せて居る、夫れゆへ梅屋勘兵衛方に滞在して居る豪傑連中には、由井民部之介正雪を首め、松田彌五七、坪田左次馬、白見治郎左衛門、伊丹傳兵衛、宇野九十郎兄弟、石橋源右衛門、松井八郎、大力坊覺念、其の他十三名の頭立つたる者が泊り込み、表面は正雪の供の如く見せかけ、二十六日の來るを今

や遅しと待ち受けて居る、其の計略としては、府中の市中へ地雷火を埋めるの考へで、其の準備は二十三日より取り掛る手筈はなつて居る、先づ夫れ迄は只何事もなく、由井正雪病氣養生と云ふ体で、暢氣に構へ込んで居る、然るに七月二十一日は當り、例の如く朝早くより起き出でたる由井民部之介正雪は廊下へ來たつて洗面を使い、二階へ上り障子を開き、東の空を睨つと打ち眺め差し昇る、太陽に目をつけて居たが、何に思ひけんアツと驚き、顔色變へて、正「失策つたッ」と、一言洩して左あらぬ体、皆々正雪の顔打ち眺め「先生何うなされました正、ナアニ、何うもしない△」ケド、只今失策つたと仰しやつたやうで……正「イヤ宜い、お騒ぎあるな、ワザと沈着き拂い、一同の不思議がるを尻眼にかけ、泰然自若と控へて居る、其の内に女中は膳部を運び出す正雪は正面に座り、其の左右に諸豪傑は居列び、同じく朝飯の膳に向ふ、處が正雪の顔色が何となく平素と異つて居るから、一同も箸を取る勇氣もなく、

心配らしく正雪の顔のみ覗き込んで居る、スルト民部之介正雪は汁椀の蓋を取り、湯氣の立ち昇るさまに目をつけて居たが、太き溜息を吐き「正」コリヤ〜、婦女、用があれば手を拍く、暫らく遠慮してくれ女「ハイ、畏まりました」女中は二階を下る、跡見送つた正雪は「正」ア、ア、折角之れ迄漕ぎつけながら、残念な事だ、我が大望も叶はぬわい」と、眩きつゝ汁碗の蓋をなし、箸も取らず、悄然といたして居る。

花は櫻木人は武士

これを見れば大「力坊覺念は 大」先生、何うか遊ばしましたか、お顔の色が只なりませんが……正「イヤ、拙者は今朝は食事を廢そう、少々氣持ちが悪い……大」夫れは何うも困りますな、お藥でも召し食ひましては……正「ナニ、夫れには及ばぬ、正雪はズイと次の間に立つ、跡に一同は互いに顔見合はし、

大「何うも分らん、先生は何んが爲めに召食らないのであろう、ジャア乃公も食ふまい △「ウム、身共も廢そう」スルト正雪は再び立ち出で「正」ア、各々、拙者に構はず召食り下さい、ナト思ふ仔細があるから、今朝は食はないのであるから、別に心配召さるな □「左様なれば、我々も頂戴いたしません ○「イヤ拙者も今朝は見合はず、誰れ一人として箸を取るものがない 大」オーイ、女中〜、早く膳を下げろ」女中はドシ〜上つて来たが女「ハイ、畏まりました……オヤツ未だ召し食ひませんので……大」ウム、今朝は一同何だか氣持ちが悪い、苦しふないから下げてくれ」女中は不審な顔して、一々膳部を取り下げ、スルト一同は正雪の周圍を取り巻き 大「先生、何うも先刻からの御様子を見るに、何とも早や合点が参りませんが、一体何う遊ばしたのでございます、何が爲めに食事をなさらんのか、我々一統も甚だ心配でなりません、何うか御心中をお明し下さいませ」尋ねられて正雪は、四邊を見廻はし「正」然らば、各

々に我が心中をお話し申そう、近にお寄り下さい……各々残念な事であるが、此處迄潜ぎつたる我々の大望も、最早や望みはござらん皆「エ、ッ……正」其の驚きは尤だが、潔よく覺悟をなさるが宜しい大「ナ、何と仰しやる先生、偕ては事露現いたしたか」と、一同は顔色變へて詰めよせる、正雪も聲を密め「正」如何にも、拙者は方々の知つて居られる通り、天文博士泰式部を味方につけ、天文学を充分研究いたし居るから、大抵の事は分る、然るに今朝東の空を見ると、何となく黒氣立ち昇り、殊に太陽の光り、平素と異つて甚だ赫ん、何うも合点行かずと思ひ居りしに、今又汁椀の蓋を取り、立ち昇る湯氣を見るに、自然と亂れたる處あり、察する處之れ全たく、江戸表にて事發覺いたしたに相違ないと心得る、素より拙者が丸橋忠彌を江戸の總大將に撰みしは、之れ一生の過失、夫れを中途にて氣附きしゆへ、清水八藏を監視として残し置きたれども、事が破れる時には是非もないもの、必らず江戸に於いて、誰か裏

切りしたるものありと覺へたり、尤も丸橋忠彌は、縦しや召捕られたりとも、決して事實を自状する氣遣いは斷じてないが、徳川家には智恵伊豆守と云ふ豪者あり、之れに覗まれたる以上は、逆も難かしい、何日か忠彌が深の淺深を檢べ居りし際、人もあろうに松平伊豆守に見付けられ、其の時には云々斯様くといひ、變相術を以つて巧く通れたれども、爾來伊豆守は常に丸橋忠彌の舉動を探つて居たに相違ない、夫れは兎に角、斯く露現いたした上からは今に此の處へ捕手が向ふは必定、兼て各々にも申しある通り、若し我々の大望成就する見込みさへあらば、大勢を憫まし、血の雨降らすも苦しくはないが、逆も其の見込みはござらん、此の上は潔よく割腹して相果てんの心底でござる各々にも其の積りで、之れ迄の運と諦め、覺悟召さるが宜しい」と、聞いた一同は余りの事に呆れ果て、互いに顔見合せ、長大息を吐いて居たが、血氣盛んの松田彌吾七はズイと席を進み出で「松」先生、實に何うも残念でございます、

最ふ僅迄漕ぎよせながら、露現をするとは情けない次第、此の儘割腹するは如何にも残念、此の上は最後の思い出に、當地へ参り居る諸浪人を集め、不意に駿府城へ押しよせ、之れを乗つ取つて根城となし、一舉にして沼津、田中の兩城を攻め落し、其の上にて合戦に及ばず、豈夫負ける氣遣いはござるまい、大力坊は何う思ふぞ、大如何にも、松田の云ふ通り、此の大力坊に二百の人数を貸して貰へば、先づ第一番に沼津へ攻めかゝり、大手門より城攻めにして、半日を出でず之れを抜き取り、勢に乗じて田中城を屠り、其の上にて隣國を切り靡け、天下に旗を翻へせば、必らず徳川の天下に不平なる大名又は浪人共草木の風に靡くが如く、旗下に馳せ参ずるは受け合ひ、先生此の義如何でございませう、正「ハッハ……、夫れは云い易くして行ひ難し、僅か駿府界限を抜き取つたりとも、逆も勝利思いもよらず、縦しや沼津、田中の兩城を手に入れたいとて、大海の一滴、何の益もない事、目的の達せざる事を知りながら、世間

を騒がせ、人命を損ずる事断じて無用、凡そ櫻の花は七日を盛りとなし、其の間散ればこそ、梅よりも賞翫され、散り際が宜いと云つて、之れを勇士の最後に擬へる位である、我が國は數島の大和魂を、櫻花に譬へ、潔よく最後を遂げる者こそ、武士たるもの本意としてある、花は櫻木、人は武士とは之れを以つて申すのである、花は散り際は死に際、香氣匂はしく雪中にも尚ほ屈せぬ梅の花も、散り際の悪き爲め、櫻ほどには賞翫されぬ如く、人間とても其の通り、死すべき時に死せざれば死に勝るの耻あり、人は最後が肝心でござる、然しながら各々方は、一命を捨てるを好まず、飽迄も生き永らへたいと思はるゝならば、夫れは御勝手次第、今の中に何處へなりと落ち延びあれよ、金子は此處に幾等でもござる、遠慮なく持つて立ち退かつしやい、左は左りながら、斯く露現したる以上は、ヨシヤ何處の果に遁れ終せたりと雖も、逆も駄目かと心得る、天高しと雖も脊を屈め、地厚しと雖も薄水を踏むが如く、枕も

高く寝る事も出来ずまい、夫れよりは潔よく死すること、武士たる者の決心
とこそ申すものでござる、虎は死して皮を遺し、人は死して名を遺す、血氣に
逸まり汚名の上に汚名を遺すは眞の武士の爲すべき處にあらず、各々方拙者
の言葉を疑はしく思はるれば、今暫らくの後、市中の模様を御覽あれ、必らず
昨夜の露現にて、今朝は當地へ知れるに相違ござらん」と、利害を説いて誠め
る、一同はハツと氣がつき、表座敷の二階へ來り、隙間より府中の町を見下
すと、平素に變り何となく、市中が騒々して居る様子、遙かに駿府城を見渡せ
ば、馬上の武士東西に奔走なし、續々登城するもの引きも切らず、俄かに手配
りに及ぶようと相見へたり、一同は由井正雪の先見に感入り大「フ、ム、之
れでは何うも残念だが仕方がない、ナカニ駿府城位を乗つ取るは造作もない
が、成程先生仰せの通り、世間を騒がし、人命を損ずるのは面白くない、
ジャア松田、先生の仰せの通りしようじやないか松「ウム、ソ、夫れば己を得

ん語したが、何う考へても惜しいなア……大「馬鹿ッ、今更ら生命が惜しいの
か……松「誰が生命が惜しいと云つた、乃公の惜しいと云ふのは、折角計畧
が露現たのが惜しいと云ふのだ、斯んな生命の二ツや三ツ何が惜しいものか、
先生、只今市中の様子を見ますると、云々斯様……何だか騒々しくござ
います正「ウム、左様あるう、アイヤ大力坊、當家の亭主を呼んでくれ大「
畏まりました、大力坊は今しも二階を降りんとする折しも、俄かに門前騒が
しく、何か罵り立てる聲が聞へる

●現金な奴だ貴様等は……

此の時大力坊覺念は、階子段は二段斗り降り、呢つと店の方を見下すと、一
人の乞食と、宿の若者二三人が、顔りに何か争つて居る、エ、イ、宅のお客
様に用がある……飛んでもない事を云ふ奴だ、手前等のような非人に、何んで

用があるものか、歸れ〜、非、黙れッ、乃公はッザ〜江戸から参つた者だ、由井正雪先生に取り次げ、分る、名前は云はんでも宜い若、此奴、イヨ〜怪しい奴だ、名前を云はんでも宜い、へ、ン……乞食に名前なんかあるかい、由井正雪先生……途方もない事を云やアがる、手前何だ、由井正雪様のお屋敷にでも奉公して居て、暇を出されて今は乞食となり、喰ふ事が出来ぬへから無心に來たのだな……乞、エッ、此奴云はして置けば無禮至極、汝ッ、一人の若者を引つ捕へ、頭顱倒と投げ出す若、ヤ、ッ、乞食の分際で生意氣な事をしやアがる、ソレッ遣つ付けろッ」三人の若い者は、右左りより打つて掛る、乞食は猿臂を伸し、掴んでは投げ取つては放り、三人瞬〜間に投げつけられ、ウン〜唸つて居る、此の体を見た大力坊覺念、何うやら聞き覺へのある聲だから大「ハテナ、ナカ〜強い非人だが……何うも聞いたような聲だ……」店先へ降り來り、ヒヨイと見ると、豈に圖らんや佐原重兵衛であるから大「ヤ

ッ、御身は……佐「オ、大力坊か、先生は……大「先生は、二階に居らつしやる佐「シヤア、お目に掛らう、コリヤ若い奴、洗足の水を持ってッ若「ホイ〜、非人に投げられた上に、洗足の水を持ってどな……大「コリヤ〜、何を愚圖〜云つて居る、此のお方は由井先生の御養子同然の佐原重兵衛と云ふお人だ、非人とは怪しからん重「オイ大力坊、最ふ宜い、乃公が非人姿だから、誰しも嫌ふわい、若いもの氣の毒じや、之れを遣る……」金子五兩投げ出すと、三人の若い奴は俄かに様子が變り、ヒヨコ〜頭を下げながら甲「へエ何うもお蔭様……濟まない事を申しまして……、オイ〜文吉、早くお洗足を下さんかい、忠太草鞋の紐をお解き申せッ、地獄の沙汰も金次第、三人の若い奴、金の顔見て、ガラリと様子が變る大「ハッハ……、現金な奴だ貴様等は」大力坊は佐原重兵衛を連れて二階へドシ〜登り來り大「先生〜、佐原が参りました正「オ、佐原重兵衛、能く來た、江戸の模様は大畧天文で知つ

た、残念な事をいたした、重兵衛はヒタリと夫れへ座り重「せ、先生、何ども
早や申し譯がございませぬ、實は云々斯様くで、丸橋忠彌、奥村八郎右衛門
が園基の争いから、遂に大望露現に及んだのでございませぬ、正「イヤ、宜く分
つた、今更ら丸橋が悪い奥村が悪いと云つた處で仕方がない、君子は交り絶つ
て悪聲を放たず、之れも天運の然らしむる處である重「ハイ、最早當地も警固
殿重と心得ますから、潔よく御切腹の程願はしふ存じます正「フム、夫れは
云ふ迄もない事、只今一同と其の事を話し居るのである、處で重兵衛、其の方
は宜い處へ来てくれた、乃公は此處に一つの頼みがある重「へ、何う云ふ事
でございませぬ、正「外でもないが、師匠楠不傳先生の息女が、縁付いて居ら
れる先は承知であろう重「ハイ、能く存知て居ります正「其の方密かに、お玉
殿の屋敷へ参り、此の一通の手紙と此の金子二千兩を手渡し申してくれ、其の
手紙は謄の書面だ、事成就いたさず、師匠の名迄汚したるは、何ども申し譯

がないと書いてある斗りだから、假令役人に見附けられた處で、少しも罪には
ならぬ、此の使者は汝より、外にはない、宜しく頼む」佐原重兵衛も仕方がな
い、正雪の手紙と金子二千兩を、確かと身体につけ重「夫では先生、私は先
生のお供をして冥途へ行く積りで之れ迄出て来たのでございませぬが、此の使者
の役目を果たした上で、潔よく切腹する考へでございませぬから、最ふ今世で、お
目に掛るのも之れが最後、何うか一足お先へ冥途へお越し下さいませぬよう、
直にお後を慕つて参ります……」と、別れを惜みハラ／＼と涙を流して居る、
正雪も鼻詰らせ正「ウム、今更ら愚痴を並へるは武士の耻づる處、何にも申す
な、早く行けッ、冥途で相待ち居るであろう重「ハッ、御免……、大力坊首
め一同、左らばだッ、重兵衛は氣を取り直し、一同に別れ表に出で、行方知れ
ずと相成つた正「最ふ之れで思い置く事更らにない、大力坊早く亭主を呼べ
……大「畏まりました、亭主は何事ならんと恐る／＼歩つて来る梅「へい、且

那樣御用でございますか 正「オ、亭主、近ふ寄つてくれ」正雪は金子五百兩を亭主の前に差出し 正「サテ亭主、此の度は誠に氣の毒の次第、何とも申し譯がない、此の金子は今の内に地中へ埋めて密かに隠し置き、時節を待つて掘出してくれ、様子は申さずとも存知て居るであらうが、其の方の家は關所にならんければなるまいと存する、其の時の用意としてくれるよう、實に亭主、御身と我れとは幼少の時よりの竹馬の友にして、今日迄交際をいたし、當地へ來る度に當家で始終厄介になつて居たが、今斯様になつて見れば仕方がない、何れ又拙者の身分は後で分る事だから、決して心配してくれぬよう頼む、又此處に金子が五百兩ある、之れは相洲鎌倉の東勝寺と云ふ寺に、みや、のぶと云ふ二人の婦女が居る、之れは拙者が先年、親の仇を討たせてやり、武術を試込んでやつた關係があるのだから、兩人に之れを渡して貰ひたい、氣の毒だが宜しく頼む亭」へエ、何うも何だか藤張り存知ませぬが、實の處 只今お蔭様がお蔭

りになると其の後へ、お町奉行所から御沙汰がありましたして、奉公人を残らず立ち退かせとの事でございますゆへ、只今其の仕度をいたして居る處でございませ、然しマア先生の折角のお思召でございませから、遠慮なく頂戴して置きます、尙ほ此の金子は屹度お届け申しますゆへ、御安心下さいませ」亭主勘兵衛は一千兩の金子を受取り、其の儘階下へ降りる、此の東勝寺に居るみや、のぶと云ふは、則ち芝居狂言でする宮城野、信夫であつて、必竟父の仇を討ち取つたるは、由井正雪の情けによる處と、正雪の果てたる後、兩人は尼となり、永く其の菩提を吊つたと云ふ事である、夫れは扱て置き、正雪首め一味の豪傑十三人、は切腹の用意に及び、床の間正面には、鎧櫃の中より取り出したる緋絨の鎧、金鍬形前立打つたる兜を、鎧櫃の上に飾りつけ、猩々緋の陣羽織、金切割の采配、菊水の定紋ついたる旗指物を左右に飾り、其の他軍用金を床の前に置き一同は靜に其の前に着座なし、由井民部之介正雪は、諸肌押

し脱ぎ、短刀を逆手に持ち、腹を撫てながら、泰然自若として一同を見廻して居る、

地獄を征伐して暴れてくれん

死を視る歸するが如き由井民部之介正雪は「正」如何に、大力坊覺然……大「ハッ、先生何に御用でござる」正「其方に頼みがある……、他ではない、大儀ではあるが、我れを首め一同の介錯をいたしてくれよう」大「ハイ、畏まりました、先生首め一同の先途を見届け、其の上にて私も潔よく腹切つて相果てませう、イザ御用意……」大力坊は鼠色の單衣を取出し、夫れを着用なし、シツカと帯をしめ、下緒を外して禪十字に綾取り、坊主頭に後鉢巻を締め、三尺二寸天正助正の鞘を拂ひ「大」先生、御用意宜くば……」正雪の後ろへスツクと立ち、正雪は神色變せず一同に打ち向ひ「正」アイヤ各々、死

耻を晒すは武士として第一の耻辱、某はお先に御免蒙むるが、決して見苦しき事のなきよう、突々もお頼み申す、假令悪名は受くるとも、流石に心掛けある武士の最後と、後の世迄も歌はれるように願いたひ、各々の内中には未だ切腹の作法を御存知ないお方があるかも知らん、無禮ではござるが、某の切腹の様を篤と御覽下されたい、何事も之れ迄は一條の夢であつた、今ぞ此の世に思ひ残す事更になし、各々左らばでござる」白紙を以つて短刀を巻き、又先を五寸ばかり出し、左手の脇腹へ當行い、ウンと下腹に力を入れ、プツリと腹に突つ立て、キリ〜と右手に引き廻し「正」大力坊、イザ介錯……」聲を相圖に、背後に立つたる覺然は、エツと振り被つたる一刀の下、忽ち正雪の首はコロリと前に落ち、之れを見届けたる一同は「松」オ、今度は乃公だ、大力坊頼むぞ、乃公は一足先へ行く、貴様も後から来い「大」オ、合點だ、今直ぐ行くから、乃公が行く迄闇を苛めないようにしてくれ「松」ウム、此の世で大

望は成就せずとも、地獄を征伐して思ふ存分暴れてくれん、ツヤア頼むツ」松田彌吾七はキリ／＼と刀を引き廻す大「エイツ、何なく斬り落す、到頭十二人の介錯をした大力坊、然ば、血汐滴る一刀を疊に突つ立て、由井正雪首め十二人の首を違ひ棚にズイと並べ、其の身は襪を外し鉢巻を取り、行季の申より墨染の法衣に珠數を取り出し、法衣を纏ふて珠數爪繰り、ヒタリと首の前に座り、暫らくの間、念佛唱へ向回に及んで居る、折しもあれや、俄にツア／＼と閨の聲、表の方騒がしく、何うやら討手の人數が、乗り込み來たつたようであるから、大力坊は突つ立ち上り、法衣の袖を後にて確かと繋り血糊の附いたる一刀を提げ、二階の段梯子より手摺に手をかけ、階下の様子を見てあれば、人數彼是れ二三百名、ツア／＼と閨を上げ、御用／＼と呼はる有様、これぞ別人ならず、當時駿府の城代を勤めたる大久保玄蕃頭の同勢と覺へたり、眞先に大久保玄蕃頭は馬を乗り出し、府中の町奉行花菱平左衛門、其の他與

力同心手先の面々、何れも身輕の扮装に及び、梅屋勘兵衛の宅の裏表を軒々を取り圍み、一人も逆さじものと構へたる勢い、物々しくぞ相見へたり、玄蕃頭は采配打ち振り、ツヤア／＼と者共、進め／＼、聲に應じて一同は御用／＼と口々に呼はり／＼、バラ／＼と亂入なし今しも二階へ懸け登らんとする、此の休眺めた大力坊、急は「大」ウム、面白い、一つ荒騰取り挫いでくれんと、一刀提げてノシ／＼段梯子を降りて來る、キラリ見て取る捕手の面々「△」ウツ、出たぞ／＼、逃げろ／＼、風に木の葉の散る如く、表へ差して先を争い逃げ出す、大力坊は少しも恐れず、段梯子を降り盡し、仁王立ちと相成り、ハツタとばかり睨まへる、此の勢に避易なし、誰れ一人打ち向ふものともなく只ツア／＼と騒ぐばかり、此の時町奉行花菱平左衛門、ツイと夫れへ進み出で花「ヤア、御用であるぞ、神妙にお繩頂戴に及べい、手向いなさば容赦はせぬぞツ、大音聲に怒鳴り付けると、大力坊はカラ／＼と打ち笑ひ大「アハ

、……、仰々しい何事でもござる、お役目御苦勞千萬、師匠由井民部之介正雪は今朝に到り、天文によつて隠謀露現を悟りたる爲め、最早無益の闘いを爲し、世間を騒がさんよりは、潔よく割腹して相果てんと、只今二階の一室に於いて由井正雪始め十二人の者、物の見事に切腹なし、愚僧介錯いたしたる次第、夫れが爲め何回に及んで居りし處、俄に門前騒がしく、何事やらんと斯く血刀を提げ、降り來たつたる處でござる、全く各々には、我々を召捕らんが爲め、斯く大勢乗り込まれたる事と心得るが、今云つた通り、正雪首め十二人は既に切腹いたしたれば、別に手向ふもの一人もなし愚僧は正雪の門人大力坊覺念と云へる者であるが、之より潔よく腹切らんと決心いたし居る處でござる、然るに各々は我れを召捕らんと所存の由し、十二人は首尾能く切腹いたしたるに、我れ一人召捕らるゝは如何にも残念である、各々方も役目とあらば見逃しもいたされまい、強て我れを召捕らんとならば、己を得ず手向い仕る、

大力坊覺念又の續かん限り、切つて／＼切り卷り、最後の思ひ出に腕前を見せ申さん、夫れども他の者が割腹せし上は、汝も共に切腹せよと仰せ下さるやうなれば、決して大力坊手向いはいたさぬ、サア返答承はりたい」と大力坊は一刀振り被り、ハツタとばかり睨みつめたる其の勢い、源平の其の昔時、西塔の荒法師武藏坊辨慶も斯くやと思ふばかりなり、町奉行花菱平左衛門も何んと返へす言葉もなく、引つ返して此の事城代大久保玄蕃頭に告げる、大久保玄蕃頭は素より戦場生、残りの古武者であるから、年齢は老つても到つて活潑な氣象、馬を進めて聲高く玄ヤア、夫れなる大力坊とやら、勇まじき只今の一言、如何にも尤なる願ひである、汝の望みに任せ、切腹の儀許しくれる、身不肖なれども當所の城代大久保玄蕃頭である、檢死の役は勤め遣はず此の場に於いて潔よく切腹いたせ、大力坊は之れを聞くと等しく大いに喜び、大誠に千萬忝ない、然らば何うか見届けを願ひたいと、法衣を脱ぎ捨て

双肌寛げ、ドツカと夫れへ座り込む。

○夫れは誰でもする切腹りだ

何んしろ大^{だい}力^{りき}坊^{ぼう}と名^なを取^とつた豪^{ごう}僧^{そう}だ、泰^{たい}然^{ぜん}として三^{さん}尺^{せき}に余^あれる太^{たい}刀^{たう}を逆^{さか}手^てに持^もち、双^{ふた}先^{せん}を太^{たい}股^こに當^あ行^がい、プツリと二^に寸^{すん}ばかり突^つき通^とし、ズイと引^ひき廻^{まわ}し、大^{だい}「ウム、未^まだ之^{これ}れなら切^き味^ちは鈍^{にぶ}つて居^いない、莞^{かん}爾^にと笑^{わら}つた其^{その}の度^ど胸^{むね}に、大^{だい}久^{きう}保^ほ文^{ぶん}蕃^{ばん}頭^{とう}は感^{かん}心^{しん}なし、支^し、ア、ア、天^{あま}晴^はれ、惜^をしい人^{じん}間^{げん}を殺^{ころ}さねばならぬ」
と、實^{じつ}に殘^{ざん}念^{ねん}に思^{おも}つて居^いる、大^{だい}力^{りき}坊^{ぼう}は腹^{はら}撫^なでさすり、脇^{わき}腹^{はら}望^{ぼう}んでプツリと突^つつさし、七^{しち}八^{はち}寸^{すん}右^{みぎ}手^ての方^{ほう}へ引^ひき廻^{まわ}し、アイト上^{うへ}へ抛^なね、引^ひき抜^ぬいて鳩^{かたて}尾^びの下^{した}へ當^あ行^がい、堅^{かた}に下^{した}へズいと引^ひく、能^よく腹^{はら}十^{じゅう}文^{ぶん}字^じと云^いふ事^{こと}を云^いふのは、之^{これ}れであ
る、首^{しゆ}尾^び能^よく十^{じゅう}文^{ぶん}字^じに大^{だい}力^{りき}坊^{ぼう}は、一^{いっ}刀^{とう}抜^ぬいて片^{かた}脇^{わき}に置^おき、切^{きり}口^{くち}に片^{かた}手^てをグイト
突^つつ込み、無^む手^ずと脇^{わき}を掴^{つか}み、ズル、ズル、と引^ひ出し、大^{だい}「アイヤ御^ご城^{じやう}代^{だい}、大^{だい}力^{りき}

坊^{ぼう}覺^{かく}然^{ぜん}の脇^{わき}を各^{おの}々^づ方^{がた}に進^{しん}上^{じやう}申^{まう}す、云^いふより早^{はや}くドツと其^{その}の場^ばへ投^なげ出^だし
た、流^{りゅう}石^{せき}豪^{ごう}氣^きの大^{だい}久^{きう}保^ほ支^し蕃^{ばん}頭^{とう}首^{くび}め一同^{いっどう}も、余^{あま}りの事^{こと}にアツと驚^{おど}き、支^し「サテ
、恐^{おそ}ろしい腹^{はら}の切^きりよう、此^{この}の年^{とし}になる迄^{まで}、未^まだ一^{いっ}度^ども斯^かふ云^いふ腹^{はら}の切^きり
方^{かた}を見^みた事^{こと}はない」と、皆^{みな}々^づ舌^{した}を巻^まいて驚^{おど}いて居^いる、本^{ほん}人^{にん}の大^{だい}力^{りき}坊^{ぼう}覺^{かく}然^{ぜん}は
一^{いっ}向^{かう}平^{へい}氣^き、大^{だい}「イザ、介^{かい}錯^{さく}組^{ぐみ}み入^いる、早^{はや}く、」大^{だい}きな聲^{こゑ}で怒^{おこ}り鳴^なつて居^いる、誰^{たれ}れ
一^{ひと}人^{にん}恐^{おそ}れて近^{ちか}寄^よるものはない、此^{この}時^{とき}大^{だい}久^{きう}保^ほ支^し蕃^{ばん}頭^{とう}は、馬^ば上^{じやう}より聲^{こゑ}高^{たか}く、支^し「ヤ
ア大^{だい}力^{りき}坊^{ぼう}、夫^それには及^{およ}ばぬぞ、速^{すみ}に吭^かを切^きれ、」大^{だい}「ナニ、笛^{ふえ}を切^きれ
ツ、夫^それは誰^{たれ}でもする腹^{はら}切^きりだ、此^{この}の上^{うへ}は之^{これ}を見^みよツ」云^いふより早^{はや}く、再^{また}び
一^{いっ}刀^{とう}取^とり直^{ただ}し、背^せ後^ごに廻^{まわ}して首^{くび}筋^{すぢ}に當^あ行^がい、大^{だい}「ヤア、方^{かた}々^づ、由^ゆ井^い民^{みん}部^ぶ之^の介^{けい}正^{せい}
雪^{せつ}の門^{もん}人^{にん}大^{だい}力^{りき}坊^{ぼう}覺^{かく}然^{ぜん}が切^き腹^{はら}の作^{さく}法^{ぽう}を、後^{こう}學^{がく}の爲^{ため}見^みて置^おけい」と、云^いふが
早^{はや}いか、左^{ひだり}手^てに刃^{やいば}先^{さき}を引^ひき握^{にぎ}り、エイト叫^{さけ}んで力^{ちから}を入^いれると、驚^{おど}くべし我^われと
我^わが首^{くび}を轉^{くる}りと前^{まへ}に切^きり落^おした、然^{しか}るに胴^{どう}体^{たい}は少^{すこ}しも倒^{たふ}れず、呢^じつと其^{その}の儘^{まま}座^{すわ}

つて居る、實に何うも人間業とは思へない、大久保支蕃頭を首め一同の役人は、イヨく感服なし、シタリヤ」と賞め讃やすまア、天晴れなる豪傑だ、惜しいものを死なしたわい、此の上は二階の様子を見届けよ、一同はドシく二階へ上つて見ると、由井正雪首め十二人は美事に腹を切り、違ひ棚に十二の首級が並べてある、此の勇ましき最後を眺めた大久保支蕃頭はまア、ア謀叛人ながらも天晴れ感心なり、流石は天下に名高き由井民部之介正雪である、非常に其の死を惜んで居る、取り敢へず死骸は棺桶に入れさせ、夫々片付けをさす、尙ほ物品は之れを奉行所へ運ばせ、處々に泊つて居る浪人者を一々召捕る、實に其の混雑は名状すべからず、萬事萬端片付いて後、梅屋勘兵衛の宅は、謀叛人を泊らせたる廉により関所となる、梅屋勘兵衛は兼て覺悟の事であるから、別に驚く体もなく、騒動終つて後、ソザく鎌倉へ出掛け、東勝寺を尋ねて、みや、のぶの兩女に合つて見ると、美事に黒髪切り落し、殊勝

にも尼となつて居る、勘兵衛も大いに感心なし、由井正雪より預りし金子五百兩を差し出して手渡しなし、尙ほ傳言をいたし、互いに正雪の死を悲しんで居る、後に到つて此のみや、のぶの兩女は、ソザく駿府へ來り、正雪等十二人を仕置にした安部川河原の傍へ尼寺を建て、此處で姉妹は恩人正雪の菩提を吊い、十三の佛体を拵へ、正雪首め十三人の石碑を建て此處に一生を終つたと云ふ事である、今に安部川河原には十三佛が残つて居る事は事實である、然るに其の後梅屋勘兵衛は、代地を買つて矢張り宿屋稼業をなし、正雪より、貰つたる五百兩を資本となし、家運はマス／＼繁昌する、諸君は御承知であろう先達の新聞に、梅屋勘兵衛の宅の跡より、石棺が現はれ、其の中には骸骨があつた、イロく研究して見ると、之れで慶安の勤王豪由井正雪の死骸である、と極り、静岡市の有志は、正雪の石碑を建設せんと、資金を募集して居ると云ふ事が記載してあつたが、シテ見ると、梅屋勘兵衛が正雪の恩義に感じ、安部

川河原に晒した死体を密かに盗み取り、我が宅へ持ち帰り、石棺を拵へて埋め
たものではあるまいかとも考へられる、夫れは借て置き、駿府の騒動も由正
雪の潔よき最後の爲め、誰れ一人手向いする者もなく、事穩かに鎮定、十三
人の首領は、七日間安部川河原へ晒すと云ふ事に相成つた、然るに此處に佐原
重兵衛は、由正雪の命に依り、密に駿府を抜け出で、矢張り非人姿で以つ
て、ドシ／＼江戸へ立ち歸り、楠不傳の娘の嫁入つて居る旗本須藤三左衛
門を訪ね、お玉に合つて正雪の遺書と金子二千兩とを手渡なし重シム、之れ
で最ふ心残りはない……然し待てよ、松平伊豆守の役宅へ自訴して出て一
つ智恵と呼ばれた伊豆守を向ふに立て、一議論に及んでくれん」と、思い決し
て兩三日宿屋に身を忍ばせ、様子を窺つて居ると、果して由正雪等は美事に
切腹して相果てた事が判つた、夫れを聞くと等しく、佐原重兵衛はドシ／＼松
平伊豆守の役宅へ自訴し出で、重恐れながら申し上げる、某は由井民部之

介正雪の門人佐原重兵衛と申すものでござる、何卒お取調べの上所刑の義を
願ひ上げます、之れを聞いて伊豆守は大いに喜び伊「ウム、今は丸橋の吟
味中である、之れは好きものが手に入つた、大いに喜び、早速白洲へ呼び出
し伊「如何に佐原重兵衛とやら、其の方は行くは民部之介の養子になる身分と
やら承はる、然るに卑怯未練にも逃げ隠れに及ぶとは何うじや、重、之れは怪
しからん事を承はる、某は決して生命惜しさに逃げ隠れは仕らん、一應由
井正雪に此の度の露現の事を知らせんと、捕方の向はざる以前に、江戸表を出
立なし、駿府へ参つたる次第、最早正雪首め一同割腹に及んだる上は、此
の世に於て望みなしと心得、斯く自訴に及んだる義でござる伊「フム、左様な
くてはならぬ事じや、大体由井正雪等が、徳川の天下に向つて、謀叛を企てる
とは心得違ひである、佐「アイヤ、お言葉でござるが、謀叛と云ふ事は、家來
が主に背くを申す言葉であつて、由井正雪は決して徳川の家來ではござらん、

左すれば謀叛とは云へますまい、或は一天萬乗の大君に反旗を翻へすを謀叛
人と云ふ、大体徳川將軍は奢り増長なし、東の代官所謂朝廷の番頭手代
と言ふ事を打ち忘れ、萬乗の大君を眼下に見下し、傍若無人の振舞あり……
伊「ア、コリヤ〜」待て、汝は治國平天下と云ふ事を存知居るか重「アハツハ
……、夫れ位いの事を存せずして、天下國家を論ずる事が出来ませうや、普天
の下率土の濱、何れか王土にあらざるなし、徳川家の八百萬石も、之れ何が爲
めに領して居るのでござる、必竟國を治め天下を平にする事を掌どらす爲め
大君より徳川へ下し給ひし祿ではござらんか夫れも思はずして、大君の御賄
料は僅か十萬石とは、一体何たる事でござる、之れを以つて徳川家には勤王の
志なく、身分を忘れ、専横の振舞をなす、所謂亂臣賊子とは徳川家を申す
のでござると、酒々として辨に任せ、徳川の暴横跋扈を論じ立てる、

○懷中腹を切るとは豪い

松平伊豆守は大いに怒り伊「黙れツ重兵衛、徳川家は之れ天下の將軍職な
らずや重如何にも左様、其の將軍職は必竟誰が命ぜし者でござる、初代
家康公不人不義を働き、豊臣の天下を奮つて漸やく得た將軍職でござらう、
然らば豊臣家から見れば、徳川家は謀叛人と言つて差支へなき譯、一旦奪い取
つた天下は、人に奪はるゝは之れ當然にあらずや、殊に況んや由井正雪は、決
して天下を樹いしにあらず、將軍の政事を朝廷に奉還なし、王政復古を斗らん
とせし譯なれば、之れ所謂勤王無二の士と言つて然り、然るに其の者を謀叛
人とは片腹痛し、之れを以つても徳川家の専横跋扈は言語同断、畏れ多くも
十善萬乗の大君に對し奉り、大逆無道と言つて然り……」立板に水を流
すが如く口喋立てた、流石の松平伊豆守をして一言半句も口を開かせない、

之れを世に佐原重兵衛の治亂問言と言つて名高いものだ、松平伊豆守も理窟には勝つ事は出来ないから、黙然として聞いて居たが、斯様な者に口を開かせ居たら、何んな事を言ひ出すかも知れないと思つたから伊最う分つた、吟味中は佐原重兵衛に繩を打てよ」と、お聲が掛る、重兵衛は口喋る丈け口喋り立てた後、懐中へ手を入れ、何か様子ありげにして居たが、暫らくすると、呢つと差し俯向いたきり、更に動かなくつた伊ハテナ、コリヤ重兵衛面を上げい、吟味中は入半申し付けるぞ、左様心得ろ、コリヤ重兵衛々」と、幾等聲を掛けられても返事をしない、下役人は側に寄り、覗き込んで見ると兩眼を閉ぢて居る役ヤ、ツ、之れは變だツ佐原重兵衛は懐中腹を切つて居る様子懐中に短刀を呑み、腹一文字に掻き切り、其の儘相果てたのであつた、流石の松平伊豆守も大いに感心なし伊天晴である、身体を微塵も動かさず、懐中腹を切るとは豪い、正雪の見込んだほどある、實に惜しい事をいたした」と、

頼りに歎息に及んで居る、此の時重兵衛年齢二十三才であつた、然るに此の度の騒動につき、第一に迷惑を蒙つたのは、紀洲家、大納言頼宣公の館へは何の沙汰もない、頼宣公之れを聞くと等しく、捨て置き難しと、早速登城の用意に及び、館を立ち出で、行列正しく櫻田見附に迄来ると、公儀より紀洲家登城の義を差し止める、素より連判状は焼き捨て、無いとはいへど、大納言頼宣公は、正雪の隠謀に加擔をして居るとの嫌疑、夫れは召捕つた浪人共が白状に及んだから初めて分つたのであつた、豪氣の大納言頼宣公も、仕方がないから行列を、紀洲坂の上屋敷へ引つ返へし、門を閉ぢ青竹を以つて圍い、閉門謹慎と云ふ事になる、然るに本國にある附家老安藤帶刀直次、之れを聞くと等しく早馬にて出府、殿中へ登城の上、老中列席の前にて申し開きに及んだ爲め、間もなく嫌疑晴れ、元の如く登城、處で安藤帶刀は虎の丸の印章について種々取り調べて見ると、全く江戸家老牧野兵庫が正雪に加擔なし

盗み出したと云ふ事が分つた、依つて本國にある牧野兵庫を召捕り、生きながら地中に埋め、竹鋸で首を切り落した、随分慘酷な刑だ、斯ふ云ふ有様で江戸表と駿府の二ヶ處は何なく鎮まつたが、大阪に乗り込んだ大將吉田初右衛門金井半兵衛、其の他三百五十人の同勢は、例によつて人目に立たぬように、處々方々に別れくに泊り、時機の來たるを待つて居たが、吉田初右衛門は少々暑氣に申てられ、病氣となつたから、萬事を金井半兵衛に委せ、其の身は長谷川半十郎と云ふ一人の家來を從へ、二三日の猶豫を得て、有馬の温泉場へ入湯に出掛け、頼りに養生をして居る處へ、捕方役人が乗り込んで來た初、ア、儲ては事が露現いたしたか……長谷川一寸來い長へイ……初、斯く、隠謀露現いたして見れば、乃公も一方の大將、其の方に功名させてやるから、未だ召捕方役人が此處へ踏み込まん先に乃公に繩打つて引き渡せ長へイ、夫れは不可ません、假令如何ようの事があるうとも、御主人を縛ると云ふ

事は出來ません、私も死を決して御主人と共々に……初、馬鹿な事を云へ、乃公の言葉を背くか、早く繩を打て、無理矢理勸めて繩を打たせる、此の時長谷川半十郎は大音張り上げ半「ヤア、吉田初右衛門は長谷川半十郎が召捕つたり」と、呼ばりながら、役人に差し出す、此の功により長谷川半十郎は一命助かり、却つて褒美を頂いた位だ、然し本人にして見ると、誠に心地が悪、遂に僧侶となり吉田初右衛門の菩提を吊つたと云ふ事、此方金井半兵衛正國は何うなつたかと云ふに、之れは捕方役人が乗り込むと其の儀、奮闘激戦の末、一方の圍みを破り、血路を開いて逃げ出したが、遂に行方知れずとなつて仕舞つた、大將討たれて殘兵全たかにず、其の余の者は或は討たれ又は召捕られ、中には逃げ延びたものもある、之れで大阪も片付いた、京都の大將十次與左衛門、副將熊谷三郎兵衛、加藤市郎右衛門を首として三百人の同勢は事露現と云ふ事は夢にも知らず、十次、熊谷、加藤の三人は、今日しも浩然の

氣を養はんと、島原遊廓へ出掛け、桔梗屋と云ふ揚屋に上り、名々太夫を敬娼にして酒宴に及んで居る、

○之れ天運の拙なき處

芳名を干歳に流す能はずんば、宜しく臭名を萬世に遺すべし、三人は暢氣に酒宴に及んで居る折しも、俄かに御用上意と捕方役人が乗り込んで来た、三人は大いに驚き、手當り次第に屈鉢の類を投げ付けながら、素早く一刀引寄せ身構へなし、十「熊谷、加藤、隠謀は露現したぞ、三「ウム、残念だッ、此の儘繩にかゝるも意苦地がない、一つ暴れ亂してやろうではないか、加「ウム、宜かろうと、三人は無茶苦茶に暴れ出し、十「ヤア、木ッ葉役人召捕れる者なら召捕つて見ろ、懼りながら由井正雪の高弟と呼ばれたる十次與左衛門とは我が事なり、一人二人は面倒だ、束になつて来れやッ」と、一刀振り冠り、近寄る役人

を斬り立て、小屋根から往來望んで飛び降り、一方の圍みを破つて、ドシ、宿屋へ戻つて見ると、早や十分に手が廻り、同勢は大牛召捕られて居る、十「オ、最ふ之れ迄なり、此の上は潔よく切腹して相果てん、繩目の耻を受くるは残念なり」と、ドシ、清水の境内へ驅けつけ、釣鐘堂の側へ来り、石段に腰打ち掛け、十「ア、ア、十中八九迄漕ぎつけながら露現するとは残念だ之れも天運の然らしむる處、如何とも詮方なし、最ふ夜明けに間もあるまい、左様だッ、双肌押し脱ぎ、美事に切腹して相果てた、中にも熊谷三郎兵衛の働き振りは、殊に勝れて目覺ましく、桔梗屋の裏手に飛び出し、群がる役人を事どもせず、縦横無盡に暴れ廻る、大休此の熊谷三郎兵衛春景と云ふ豪傑は、健脚を以つて其の名を知られ、一日悠々八十里を歩くと云ふ驚くべき足の達者な人であつた、其の他武藝十八般に秀で、丸橋忠彌、金井半兵衛、吉田初右衛門、佐原十兵衛など肩を並べ、由井門下の横紙破りと呼ばれたほどの人物で

あるから、其の履歴にも随分面白い處があるから、生立の至極壯快なる處を一寸述べる事にしよう、ソモ此の熊谷三郎兵衛春景と云ふは、大和郡山の城主十三萬石、松下總守の家臣で、三百石を頂戴したる熊谷將監の一人子であつて、父が四十二才の尼年に生れたのであつたが、名前を附ける段になつて、夫婦はイロ／＼と考へた揚句、妻のお咲は將監に向い「若し貴公、今日は七夜ですから、宜い名を附けてやらねばなりません、妾は何うも考へがつかせません……」將乃公も、昨夜から内々考へて居るのだが、行末豪傑になる立派な名を附けたいと思つて、書物も取調べたが、頓と宜い名は見當らんものじや、眞逆太郎平や權兵衛では面白くない……「咲」ホ、ハ、權兵衛は種撒きらしい名で不可ませんよ、武士らしい名前を……將「サム、待て、乃公が一つ考へて見る……」將監は腕拱いて考へて居たが將「オ、有る、宜い名を思いついた咲」へエと何う云ふ名前……將「外ではない、此の松平

家には山縣市郎兵衛、望月八郎兵衛、上杉五郎兵衛と云と三人の豪傑がある、今は何れも老人ではあるが、千軍萬馬を往來した古武者で、目下は隱居役……勝手勤と云ふ身分である、當松平家では、之れを松平の三郎兵衛と云つて、隣國迄其の名が聞へて居る事は存知て居るのであろう「咲」ハイ、宜く存知て居ます、將「其處だ、其の三人を一處に集め、今度生れた子を三郎兵衛と附けるのだ、名は實の實なり、又は名は体を現はすと云つて、成長の曉には三人を合せたよりも未だ豪い豪傑となるかも知れん……」と、云ふを聞いたお咲を初め親族一同は、皆々一議に及ばず同意いたし「○成程、夫れが宜かろう、三郎兵衛とは宜い名前だ」と、遂に三郎兵衛と名付け、蝶よ花よと愛育して居る、此の三郎兵衛生れ落ちて漸々十日ばかり経つと、早やソロ／＼歩き出す、千ヨ／＼走る、實に何うも足の力の強い事は驚くばかり、父の將監も呆れ果て、將「コレ咲、未だ其方の産後の肥立も碌々調つて居ないのに、早や三郎兵衛

は歩き出したが、何んぞ可笑しな子ではないか、此奴飛脚にしたら宜かろう、
「咲」オヤッ、飛脚なぞと縁義の悪い事を仰しやつて……、妾は餘り智恵附の早
いのに驚いて居ります、昨日邊りは樞から庭へ飛び降りまして、仲間の源助と
走りつこをして居ましたが、源助が到頭負けました……將「フム、恐ろしい足
の強い子だ、マア何より結構だ」と、夫婦は氣をつけて養育して居る、處が其
の後變つた話もなく、三郎兵衛早くも七才となつた、或夜の事父の將監は宿直
が當り、殿中に勤めて家にあらず、三郎兵衛は母のお咲と一間に寝ね、夜も次
第に更け渡る眞夜中頃、何れより忍び込んだか、一人の曲者ノコくお咲と三
郎兵衛の寝てる一室に入り來り、兩人の枕許に突つ立ち、ズラリと一刀引拔
き足を揚げてお咲の地をハツタと蹴り、曲「ヤイ、起きろく、チト無心があつ
て参つたのだ」云はれてお咲はハツと驚き、蒲團の上に取り直り、睨つと曲者
の風体を目をつけて居る、云ふても三百石を頂く武士の妻であるから、沈着き

拂つて騒ぐ色もなく「咲」此の眞夜中に何用あつて参つた、慮外をしやると許
さんぞッ」と、弱味を見せじと吐りつける、曲者も左るもの、カラくくと打ぢ
笑い「曲」何に用とは事可笑しい、斯く眞夜中に忍んで來る以上は、云はずと知
れた強盗だ……然し乃公は金錢に目を掛けて來たのではない、外に少々無心が
ある……「咲」ナニ、強盗に來て金錢に目をかけぬとは……曲「如何にも左様だ
品は品だが貰つて歸る品ではない、乃公の意に従へば夫れで宜いのだ……「咲」
エッ、良人ある此の身に向つて……」と、云ふ内にも兼て女の嗜み、隠し持つ
たる懐劍に手をかけ、寄らば切らんと身構へる、曲者は怯どもせず、曲「騒ぐ
な女、其方は今年三十九才でなら、姥櫻ではあるが一家中に聞へし美人、乃
公は日頃より汝に思いをかけて居る、城下に町道場を開く和佐大九郎である
今夜は幸い熊谷將監は宿直で不在と承り、本望遂げるは此の時と、ソ
ザく乗り込んで來た心賢男だ、何んぞ憎くはあるまいかの……」と、云ひ

つゝ覆面頭巾を取りのけた、お咲は其の顔呢つと見ると、紛れもなく和佐大九郎であるから、流石のお咲もアツとばかりに仰天なし、呆れ返つて居るばかり夫れも其の筈、此の和佐大九郎と云ふ人物は、元九洲島津の浪人で、目下は郡山に來たつて町道場を開き、門人の百名以上もある武術家、妻もなく子もなく、今年三十六才の血氣盛り、然も劍術は無念流を使い、松平家の指南番神野源吾兵衛も遠く及ばないと云ふ評判、熊谷將監とは若の友達で、常に往來をして居る間柄なのである、處が此の大九郎、熊谷屋敷へ來る度に、何時も妙な目付をしてお咲を眺め、時には袖を引つ張る事もあるので、お咲は非常に此の大九郎を嫌つて居る、其の人間が思い掛けなくも、今夜忍び込んで來たのであるから、お咲の驚くのも無理はない、お咲は漸々言葉を和らげ「咲、誰方かと思へば和佐大九郎様、良人もあり子迄ある妾に向つて、餘りと云へば慮外のお言葉、御酒機嫌の冗談か、夫れとも狂氣ばし召さつたか、家來や召使いが

目を覺せば、内濟では治まらずない、良人將監にも包み隠して置きますゆへ早くお歸り遊ばせ、御冗談も宜い加減になさいませ」と、嗜められて大九郎はカラ／＼と打ち笑い「大アハ、家來や召使いに恐れては斯んな仕事が出来るものか、一旦男の口から云ふ出したからには、是が非でも思いを遂げるのだ、サア諾と云へ、否と云つても、手込めにして思いを遂げる、サリ恨根を察へて返答せよ」と、一刀疊に突き刺し、威文句を並べて居る。

○小忤と思つたが不覺の基だ

お咲も今は絶体絶命、若しや我が子に怪我あつては大變と、三郎兵衛の頭の上より密と蒲團を被せかけ、大九郎の油断を見濟し、懐劍抜く手も見せず、ヤツと叫んで斬りつけた、相手は云ふても武術を以つて世を渡る和佐大九郎だ、ヒラリ体を躲してお咲の利腕ムツと掴み「大ヤイツ、生意氣な事をする奴だ、

女風性に遣られる、和佐大九郎ではないぞ、最ふ此の上は腕突で、乃公一人が樂しむのではない、貴様も共に宜い思ひをするのだ、シタマタ騒がず静かにしろ」と、短切モギ取り押し伏せた、お咲は小雀の荒鷲に於けるが如く、大力無双の大九郎に押し村けられては堪らない、成れど日頃より嗜み深き女であるから、聲を立て、家來や召使いに悟られては面目ないと、此の場合にも四邊を憚り、咲人でなしの大九郎、何をするッ……、其處放せッ、人面獸心の其方等に自由になる妾でないぞ、肌身を汚がされる妾ではない……と、頻りに藻掻き苦しんで居る、大九郎は力に任せて押へつけ、抵抗するを事もせず、咄喰お咲の上に馬乗りとなり、既に如何はしき振舞に及ぼんとする、實に落花狼籍、最も危き此の場の光景、實に危機一髪、其の折柄、今迄蒲團の下に被されて居た當年七才の三郎兵衛は、ゴソ〜と裾の方へ抜け出すが早いか、突然母の取り落したる短刀拾い取り、物をも此はず大九郎の横手へ廻り、脾腹を

目掛けてブス〜と、柄を通れと刺し込んば、不意を喰つて何に堪らん、流石の大九郎も、急處の痛手に力緩み、アツと叫んで横様に打つ倒れながら、三郎兵衛の首筋抱へ込み、土汝ッ、ゴ、小悴と思つたのが不覺の基だ、残念だッ……ッーン〜締めつけられでも三郎兵衛は一向平氣だ、三、叔父さん、痛いかい阿母さんを酷い目に遭すから、坊が返報をしてやつたのじや、之でもか〜と、短刀をガリ〜捻じ廻す、大九郎は七轉八倒の苦しみ大「ウム……、ザ、残念だッ……」云ふ聲も次第〜に弱り行く、お咲は素早く跳ね起きて、咲「三郎兵衛、能くお前は助けてくれた、其の手を緩めては不可ないよ、三、阿母さん坊が此奴は引受けますから、早く皆を起して下さい……」と、召ふた兒に教へられてお咲は漸々召使を呼び起す、家來は追取り刀で、奥の居間へ駆け来り、三郎兵衛の働を見て二度屹驚家「ヤ、坊様は豪い事をなさいました、私等は少とも存じませんで……何うも濟みません事……」と、一同がワイ〜

懸いて居る奴を、お咲は制して「咲」靜かにく、程なく夜も明けるであろう、
 三郎兵衛も最ふ放しても大事ない……三「イエ、阿母さん、此奴が死んだまゝ坊
 を抱へて放さないのです……」咲「オヤ、夫れは大變じや、三平も松藏も、早
 ふ大九郎の手を放して……」家「へい畏まりました、ヤイ和佐大九郎、能くも奥
 様に無体の戀慕をしやアがつた、天罰は立處に到つて、坊様に殺されるとは
 宜い態だ、乃公が最初から知ろうものなら、素首引抜く處であつたのだ……へ
 、ン何とか吐せい、劍術使いでも駄目の皮だい、相手が既に死んで居るのを
 見て、俄かに力味返つて居る「咲」コレ、死んだものに威張つた處が仕方な
 ない、早ふ其の腕を曲げて……、小指位折れても構はないよ」と、お咲は家
 來に指圖して、何なく三郎兵衛を引き放させ家「坊様お怪我はございませんか
 ……」三郎兵衛は起き上つてニコニコ笑いながら三「コレ、松藏も三平も何故
 早く來ない、知つて居て怖かつたから來なかつたのであろう家「イエ坊様、左

様云ふ譯ではございません、實以つて何にも存じませぬので……ツイ寢入り鼻
 でございまして……三「馬鹿云へ、彼んなに騒がしいのに判らん筈があるもの
 か、阿母さんに若しもの事があつたら何うすると云ふ事が小供のようではない
 から、家來の者共は大いに恐縮して居る、左様斯ふするうち夜が明けた、聞
 もなへ熊谷將「監は城内より下つて來る、委細を聞いて或は驚き且つ喜び、
 將「フム、憎くきは和佐大九郎である、夫れに引代へ三郎兵衛は我が子ながら
 感心の到り、早く此の事を役所へ届けなければならん」と、直様手續に及び
 檢死を受けて大九郎の死骸を引渡す、サア此の事が一般に知れ渡る、一家中の
 ものに何れも三郎兵衛の働に感じ甲「イヤ、將「監殿の子息三郎兵衛と云ふ
 は、年は漸々七才だが能くも和佐大九郎を刺し殺したものだ乙「如何にも其通
 白、三ッ兒の魂い百迄と此ふ事があるから、成長したら何んな豪いものになる
 か分らん、イヤ怖ろしい子供もあるものじや」と、寄ると隣ると此の噂ばかり

何時しか此の事が下總守殿の耳に入り、若年ながらも天晴とあつて、十才の曉には若殿龜若君のお相手として召出される、之よりズン／＼と出世して、武藝十八般は悉く習い覺へ、松平家に松ては隨一の豪傑となつた、處が主君下總守様が女色に耽り給ひ、松平家の政事が大いに亂れて來るを憤慨して、三郎兵衛は若殿と相談の上、密に悪人征伐を爲し、松平家を退散して浪人となり一生涯二度の主取りをせず、天下を漫遊して居る折柄、圖らずも由非正雪に出合ひ、勤王の大儀を説かれて、遂に其の門下に加はり、徳川幕府、轉覆の大隠謀に加擔なせし處、事志と違ひ、京都に於いて隠謀露現に及んだのであつた、之れぞ熊谷三郎兵衛生立ちの一段。

○虎は死して皮を遺す

虎は死して皮を遺す、人は死して名を遺す、豪傑熊谷三郎兵衛は桔梗屋の裏手

に飛出し、縦横無盡に暴れ廻つて居たが「ア、残念なり、我れ健脚日に八十里を歩く事容易なり、此の場を落ち延びるは何の造作もない事だが、日本六十餘洲何れへ逃げ延びた處で、徳川の政事普ねき以上は、逆も生命全ふする事思ひもよらず、此の上は潔よく切腹して、武士の最後を見せてくれん」と、ズン／＼其の場を切り抜け、足に任せてドシ／＼と、嵯峨の釋迦堂迄歩つて來り釋迦堂の階段に腰打ち掛け、暫らく待つて居ると、漸々役人は追つ掛けて來た、三郎兵衛大音揚げ「三／＼ア／＼木ッ葉役人共、今ぞ天下の豪傑熊谷三郎兵衛の最後を見せてくれん、汝等子々孫々迄の語り草にいたせよ」と、云ふより早く突つ立ち上り、一刀逆手に胸寛け、遂に美事なる立腹切つて相果てた、實に惜しむべき勇士であつた、其他加藤市郎兵衛は死遅れて召捕られ、浪人一同は栗田口に於いて死罪となる、斯く四ヶ處とも事なく鎮まり、只殘るは江戸の總大將たる丸橋忠彌と清水八藏の處分、之れは鈴ヶ森に於いて磔刑と

いふ事相成つた、然るに丸橋忠彌盛澄が磔刑になつた其の晩の事、鈴ヶ森の處刑場へ深編笠で面体包みし一人の浪人來り、番人に打ち向い、浪一拙者事は、今日此の處に於いて死刑になつた。丸橋忠彌盛澄とは義兄弟の約を結んだる柴田三郎兵衛と云ふものである、只今迄は身法に似たれど、一旦姿を隠して居たが、之れは丸橋の先途を見届けん爲めである、然るに斯く忠彌も處刑になつたる以上は、我れも之れ迄なりと思ひ、此の處迄名乗つて参つたのである、依つて義兄弟苦樂を共にせん爲め、拙者此の處に於いて切腹して相果てる、各々方も迷惑ながら、柴田三郎兵衛の切腹を見届けて頂きたい、番人は之れを聞いた丈けで、目を圓くし、中には早腰を抜かす奴もある、柴田三郎兵衛は番人一同を尻眼にかけ、磔刑柱の下に來たつてドツカと座り、下から磔刑に上つて居る忠彌の顔を見掲げ、柴丸橋、貴様も淺ましい姿になつた、殊に貴様の母や女房も、何うやら死罪になつたと云ふ事であるが、決して人を怨む

な、大事の前の小事、些細な圍碁の争いから、折角之れ迄目論見し事も、當地にて露現となり、唾貴様も口惜しかろうが、之れ天運の拙なき處、乃公は無念骨髄に徹して居るが、今は何んと云つても仕方がない、切めて兄弟の好身を思ひ、我れ此の處に於いて切腹いたし、汝の跡を慕つて行くぞ、イザ見届けてくれいと、生ける人に物云ふ如く、双肌押し脱ぎ、美事腹一文字に掻き切り、返へす刀に唾喉笛貫ぬき、俄破と俯伏しに打つ倒れた、夜が明けると番人より町奉行所へ届け出る、本來ならば柴田三郎兵衛も一方の大將分であるから、首を晒すのが至當であるが、武士道に叶つた遣り口であるから、松平伊豆守の計らいにより、柴田三郎兵衛と、佐原重兵衛の兩名丈けば、格別の情けを以つて、其の首は獄門に晒さない事にする、今でも自首輕減と云ふ法律があつて、名乗つて出た者は、如何なる罪によらず、一等を減ずる事になつて居る、昔しでも矢張り自訴して出た者には、特別の情けがあつたものと見へる、尙ほ正當

の屋敷にありし軍用金は此の度の一條につき、一命を捨てた者の妻子に、手當として夫々分配してやる、之れは由井正雪が遺言に書き残して置いた爲め、徳川幕府にも由井正雪の武士らしき最後に免じ、一萬兩は正雪一味の遺族へ分配したのであつた、然るに此處に獅子心中の虫と云ふは、裏切りをした奥村八郎右衛門である、就中丸橋忠關は如何に無念であつたであらうか、此の騒動終つて後、奥村八郎右衛門は牢内より引出され、神妙に訴人をしたる廉により、八百石を以つて旗本に取り立てられる、之れが眞の武士であれば、自分の口先一つで多勢の者を殺したのであるから、潔よく切腹して果てるのが常然、然るに八郎右衛門は、親と兄に泣きつかれた爲めと云へ、何うやら生命が惜しくなり、八百石を貰ひ、旗本になつて大喜び、大威張りで蛙面水然と極め込んで居る、心あるものは誰一人指弾しないものはない、處が或日の事奥村八郎右衛門は、只一人自分の屋敷を立ち出で、隅田川へと夕涼みに出

掛けた、八郎右衛門風に吹かれながら、ブラリ／＼と歩いて居ると、深編笠に面体包みし大兵肥満の武士がノソリ樹蔭から現はれ出で、八郎右衛門の行手に立ち塞る、八郎右衛門が右へ除けようとすると同じく右、左りへ躲そうとすると同じく左りへ寄る、八郎右衛門大いに怒り「八」エツ、無禮者奴ツ……」大喝一聲怒鳴りつけ、ヒヨイと笠の中を覗き込んで吃驚仰天「八」ヤ、ツ、貴様は金井……」云はせも果てず件の武士は「エツ、獅子身中の虫奥村八郎右衛門登悟しろツ、拔打ちに肩先深く斬り付け、踰越く處を躍り掛つて、何なく首を刎ね、素早く血刀拭つて鞘に納め、バラ／＼と其の場を逃げ去り、遂に姿は見えなくなる、何時の間に江戸へ入り込んだか、之れが則ち金井半兵衛正國である、八郎右衛門の父の宗的、兄の藤四郎は此の知らせを聞いて大いに驚き、隅田川へ馳けつけ、泣く／＼死骸を引き取つたが、誰の所業とも分らず、多分正雪一味の生き残りたる者の爲せる業に相違ないと、此の事を公儀へ

届け出で、其の夜は親族打ち集り、泣いたり怒つたりして居る處で、覆面頭巾の一人の武士乗り込み來り、突然父の宗的に斬り付け、右の腕をザツクと落し返へす刀に藤四郎の右手を同じく斬り放し、其の儘何處ともなく逐電して仕舞つた、之れも金井半兵衛正國の所業とは、誰あつて知る者がない、其の後半兵衛正國は、遂に行く處を知らず、或は蝦夷地へ押し渡つたのであるとも云ふ、奥村宗及及び弓師藤四郎は、肝心の右手を斬り放され、生れも附かぬ不具者となり、家業の弓も出来なくなり、零落して之れ又行く處を知らず、或る人が鈴ヶ森の片邊りの非人小屋で見受けたとも云ふが、其の眞否は確かに分らん、要するに人を呪はゞ穴二ツまは此の事であろう、惜しいかな由井正雪志央はならずして中途にして斃る、正雪の如きは實に不世出の英雄と云つて爾りであらうと考へる、之れを以つて大團圓とする。

丸橋忠彌 終

大正二年六月廿五日印刷
大正二年六月三十日發行

不許複製

【錢五拾貳金價定】

著者 雪花散人
發行者 立川熊次郎
印刷者 宮野孝恩
大阪市東區博勞町四丁目十三番地
大阪市東區博勞町一丁目一番地

發賣元

書籍業

立川文明堂

電話南三〇九四番
振替口座(大阪)一四六一番

大阪市東區博勞町心齋橋通



立川文庫

(天金總) クロース

定價金貳拾五錢均一

立川文庫は我國武士道の精華として古今に譽てし英傑の傳記を最も平易に高尙に著述せしものなれば何れの階級を問はず家庭の好讀物として世の激賞を博せしものなり、今や其の種三十有八種の多きに上り、其版を重ねる事各萬を越ゆる事幾數なるを知らず、幸に愛讀の榮を賜へ

1	諸國一休禪師	5	智謀眞田幸村
2	諸國水戸黃門	6	精華岩見重太郎
3	碩智大久保彦左衛門	7	諸國最明寺時頼
4	伊賀の月荒木又右衛門	8	碩智太閤と曾呂利

9	精華後藤又兵衛	17	精華山中鹿之助
10	精華宮本武藏	18	水戸黃門關西漫遊記
11	新譯ロビンソン漂流記	19	荊萱石童丸
12	精華堀部安兵衛	20	精華斑鳩平次
13	太閤記卷の一 木下藤吉郎	21	精華塙團右衛門
14	柳生十兵衛旅日記	22	精華戸田新八郎
15	西郷隆盛	23	精華大石内藏助
16	精華塚原卜傳	24	精華關口彌太郎

露光量違いの為重複撮影

25	太閤記 卷の二	羽柴筑前守	33	木村又藏
26	精武士道	大石内藏助東下	34	荒川熊藏
27	義民	佐倉宗五郎	35	寛永御前試合
28	眞田幸村	諸國漫遊記	36	滑稽左り甚五郎
29		井上大九郎	37	太閤記 卷の三
30	大久保 彦左衛門	諸國漫遊記		豊臣秀吉
31	精武士道	伊東彌五郎		
32	精武士道	衆		
		平内		

文明堂發行目錄

小宮水心著	註解日本外史	定價壹圓廿錢
小宮水心著	模範記事文	定價壹圓廿錢
小宮水心著	三體書翰文	定價六拾五錢
小宮水心著	新論文	定價六拾錢
小宮水心著	美文的書翰文	定價六拾錢
松影散人著	美文大成	定價六拾錢
小宮水心著	美文的書翰	定價六拾錢

25	太閤記 卷の二	羽柴 筑前守	33	木村 又藏
26	武士道 精華	大石内蔵助東下	34	荒川 熊藏
27	義民	佐倉宗五郎	35	寛永御前試合
28		真田幸村諸國漫遊記	36	滑稽談 左の甚五郎
29		井上大九郎	37	太閤記 卷の三
30	大久保 彦左衛門	諸國漫遊記		豊臣 秀吉
31	武士道 精華	伊東彌五郎		
32	武士道 精華	平内 采		

文明堂發行目錄

小宮 水心著	頼山陽著 小宮水心註	註解日本外史	定價壹圓廿錢
小宮 水心著		模範記事文	定價壹圓廿錢
小宮 水心著		三體書翰文	定價六拾五錢
小宮 水心著	二十世紀	新論文	定價六拾錢
小宮 水心著	思想交換	美文的書翰文	定價六拾錢
松影 散人著	作文良材	美文大成	定價六拾錢
小宮 水心著	思想交換	美文的新書翰	定價六拾錢

松影散人著 作文 頁材 記事文大觀 定價六拾錢

西垣堯則解說 新譯 伊蘇普物語二百話 定價六拾錢

楓葉散人著 青年 立志修養編 定價參拾五錢

楓葉散人著 新撰 祝辭演說大成 定價四拾五錢

井上文學博士題字 西垣堯則著 品性修養 人格鍛練 格言教訓全書 定價六拾錢

菊池幽芳校閱 英語研究會編 二十世紀 日英手紙之文 定價六拾錢

元木貞雄著 獨修 英和新會話 定價五拾錢

園部紫嬌著 講話 資料 新お伽百話 特價參拾錢

十返舎一九著 醉夢樓胡蝶訂 校訂 東海道中膝栗毛 定價五拾錢

文學博士重野安釋評 文學博士三島毅註 清儒章炳麟評 大野雲濠講述 老莊講義 定價參圓

立川文明堂編 改正 日本法律全書 定價七拾錢

立川文明堂編 改正 日本六法完 定價四拾五錢

前檢事宮原校閱 法典講習會編 改正 刑法問答講義 警察犯處罰令、刑法施行法、刑事訴訟法、監獄法 定價五拾錢

立川文明堂編 民法 定價貳拾錢

立川文明堂編 民事訴訟法 定價貳拾錢

立川文明堂編 商法 定價貳拾錢

立川文明堂編 新刑法 警察犯處罰令、刑法施行法、刑事訴訟法、監獄法 定價貳拾錢

立川文明堂編 稅法 定價貳拾錢

法典講習會著 言文一致 改正刑法問答註釋 施行法、監獄法、警察犯處罰令 定價廿五錢

立川文明堂編 市町村制郡制 附 戶籍法 定價貳拾錢

琵琶歌講習會長 森野先生著 名家曲譜 選節琵琶歌 定價五拾錢

立川第一文庫編 諸國漫遊 一休禪師 定價貳拾五錢

立川第二文庫編 諸國漫遊 水戶黃門 定價貳拾五錢

立川第三文庫編 頓智奇談 大久保彦左衛門 定價貳拾五錢

立川文庫 (天金總ク口 一ノス願美本)

立川第一文庫編 諸國漫遊 一休禪師 定價貳拾五錢

立川第二文庫編 諸國漫遊 水戶黃門 定價貳拾五錢

立川第三文庫編 頓智奇談 大久保彦左衛門 定價貳拾五錢

立川第四文庫編 伊賀水月 荒木又右衛門 定價貳拾五錢

立川第五文庫編 智謀 眞田幸村 定價貳拾五錢

立川第六文庫編 武士道精華 岩見重太郎 定價貳拾五錢

立川第七文庫編 諸國漫遊 最明寺時頼 定價貳拾五錢

立川文庫 第二十四編 武士道 精華 關口彌太郎 定價貳拾五錢

立川文庫 第二十五編 太閤記 卷二 羽柴筑前守 定價貳拾五錢

立川文庫 第二十六編 武士道 精華 大石內藏助東下り 定價貳拾五錢

立川文庫 第二十七編 義民 佐倉宗五郎 定價貳拾五錢

立川文庫 第二十八編 眞田諸國漫遊記 定價貳拾五錢

立川文庫 第二十九編 井上大九郎 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十編 大久保諸國漫遊記 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十一編 武士道 精華 伊東彌五郎 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十二編 武士道 精華 桑平内 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十三編 豪傑 木村又藏 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十四編 滑稽 奇談 左り甚五郎 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十五編 太閤記 卷三 豐臣秀吉 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十六編 寬永御前試合 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十七編 豪傑 荒川熊藏 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十八編 一休禪師頓智奇談 定價貳拾五錢

立川文庫 第三十九編 明烏十勇士 定價貳拾五錢

立川文庫
第四十編

真田三勇士

猿飛

佐助

定價貳拾五錢

香夢散人著

美文的候文

定價貳拾五錢

幸田柴朗著

新体詩編をもひで

定價貳拾五錢

幸田柴朗著

作文良材美文の海

定價貳拾五錢

川原閑舟著

俳句と川柳

定價貳拾五錢

香夢迷仙著

花笑柳媚美人千姿

定價貳拾五錢

渚遊山人著

作文良材遊紀文

定價貳拾五錢

香夢山人著

葉書小品落花片片々

定價貳拾五錢

露香夢仙著

落花流水戀

定價貳拾五錢

里魚氏編著

百題美文資料

定價拾五錢

裁縫講習會著

新案裁縫全書

定價四拾錢

割烹講習會編

和洋實用家庭料理法

定價四拾錢

同 家庭惣菜料理

定價貳拾五錢

春陽軒主人述

手輕百種洋食のおけいこ

定價貳拾五錢

大阪物理學校
最近著述

新撰算術講義 井二例題精解附公式

定價壹圓八拾錢
特價壹圓五拾錢

數學專攻會著

中等教育實用新算術

定價參拾錢

研數學館著

普通教育

珠算獨習全書

定價參拾錢

陸軍步兵大尉
岡崎平次郎著

改正

新步兵須知

定價參拾錢

十橋樓主人編

冠吟一萬集

定價參拾五錢

原田黃雲著

偉人叢書

一休和尚

定價參拾錢

報効會編

偉人叢書

二宮尊德翁

定價金參貳錢

精華山人著

偉人叢書

大石內藏助

定價參拾錢

梅田愛水著

二十世紀

實用書簡文

定價參拾錢

文學專攻會著

模範新撰

帝國書簡文

定價參拾錢

274

275



終

